連載

あのマチ このムラ

地域おこし活躍中

No64

厚沢部町の事例

―「森と大地の夢を育むまち」をキャッチフレーズとした地域振興―

北海道の中では古くから開拓され、メークイン（じゃがいも）をはじめ、大根、コメ、光黒大豆などの農産物に恵まれ、時流に逆行して〝世界一素敵な過疎の町〟を掲げている厚沢部町を紹介する。

1．厚沢部町のプロフィール

厚沢部町は、函館市から北西に車で約一時間一五分、北海道南西部、檜山振興局南東部にある農林業を基幹産業とする町で、面積は四六〇・四二㎢、人口密度一〇・二人／㎢である。

地名の由来はアイヌ語で、「アッ・サム（楡皮・のそば）」「ハッチャム・ベツ（桜鳥・川）」といった諸説がある。

古くは松前藩の所領で、延宝六年（一六七八年）同藩のヒノキ山開放により、この伐採のため本州から杣夫（そまふ）が渡来した。農業を副業として定着し、各河川流域の開墾が始められた。

明治五年（一八七二年）北海道開拓使の管轄となり、明治九年（一八七六年）俄虫村戸長役場（がむしむらこちょうやくば）を設置。明治三九年（一九〇六年）四月に二級町村制を施行し、村名を厚沢部村とした。昭和三五年（一九六〇年）字名地番改正、昭和三八年（一九六三年）三月に町政施行し現在に至る。

気候は年間を通して湿度が低く四季がはっきりとしている。暑さ寒さも適度で極端に暑くなったり寒くなることも少ない。年平均気温八℃、最高月平均気温二五℃、最低月平均気温－五℃、年間降水日数七〇日、年間降水量一、六二五㎜、最大積雪深五八㎝と、寒さが厳しい北海道の中でも南に位置するためか比較的温暖で自然を楽しみながら生活できる。

人口は幼年人口（〇～一四歳）五四一人（構成比一一・三％）、生産年齢人口（一五～六四歳）二、七一七人（同五六・九

%)、老齢人口(六五歳以上)一、五一七人(同三一・八%)総数四、七七五人であり、就労人口は第一次産業八四八人(同三四・九%)、第二次産業四一五人(同一七・一%)、第三次産業一、一六四人(同四八・〇%)である。(平成一七年国勢調査より)

2・植物の北限・南限が重なるマチ

まちの八割以上を森林が占め、厚沢部川が流れる豊かな自然を有する厚沢部町は、ヒバ(ヒノキアスナロ)や五葉松の北限の地であるほか、トドマツの南限の地でもあり、南北の植物の両方が自生する学術的にも貴重な地域である。

まちの真ん中に「太鼓山」という標高一四五・九mの眺望を楽しめる景勝地があり、春はツツジ、秋は紅葉が季節を彩る。頂上で強く足踏みをすると、「ドンドン」と太鼓のような地鳴りが起こり、これがこの山の名前の由来と伝えられている。

まちの中央を流れる清流・厚沢部川は、鶉川(うずらがわ)や安野呂川(あんのろがわ)をはじめ多くの支流を集め田園地帯をゆったり流れ、鮎釣りのメッカとして知られ、大地に潤いを与えてくれている。

厚沢部町は清流に、田園に、そして森に流れる素敵なふれあいの時間があり、風とたわむれ、清らかな感動に出会うことができるマチである。

あっさぶふるさと夏まつり
巨大メークインコロッケ製作風景

ヒノキアスナロ林

太鼓山

3・江戸時代末期、日本の北限のマチ

松前藩は、江戸幕府により北方警備の役割を担わされ、嘉永二年(一八四九年)に幕府の命令で松前福山に築城を着手し、安政元年(一八五四年)に完成させた。

松前藩は明治元年(一八六八年)九月に突如、住み慣れた松前城を離れ、約八〇km北にある厚沢部の館(たて)村の平坦な丘陵地に新城を着工した。松前の地は港を支配するには都合がよいが、海岸線に間近であったため、海からの砲撃を受けた場合にはひとたまりもなかったためである。しかし、館城は同年一一月十五日に旧幕府軍の攻撃を受け落城した。

館城跡は(いわゆる天守閣が

ある城ではないが）日本最後の和式城郭として高い価値が認められ、平成一四年に国指定史跡となり、厚沢部町教育委員会が平成一七年から継続的に発掘調査を進めている。これまでの調査で城跡は一辺が約二〇〇ｍの正方形に近い形の外郭線や礎石建物の跡が見つかっている。

厚沢部町は、幕末から明治という近代への胎動期に旧幕府軍と松前藩が交錯した、北海道における歴史の通り道があったマチである。

館城址の碑

４．メークイン（じゃがいも）発祥のマチ

メークインは、男爵と並ぶじゃがいもの代表的な品種。

メークイン（May Queen）の名前のおこりは、ヨーロッパ各地で五月に行われる「五月祭」で、未婚の女性の中から選ばれる「五月の女王（メークイン）」から来ている。

原産地はイギリスで、エリザベス一世が普及の後押しをしたとされるが、現在イギリスでは栽培されていない。

日本では、男爵が明治末期から栽培されているのに対して、メークインは大分遅れて、大正一四年にかつてこの地にあった北海道庁檜山農事試作場で試作が行われたのが最初であった。

以来、厚沢部においては他の品種と交わることがないようにメークインのみしか栽培されないという徹底した管理の下で生産されているという。

開拓時代の北海道は米の生産が困難で、代わりの主食として寒冷地での栽培が容易なじゃがいもの生産が奨励された。現在でも全国の生産量の八〇％近くが北海道産である。

メークインは病害に弱く、他の品種と比べて栽培の難しい品種だったため、普及には時間がかかり、昭和一六年以前はあまり注目されなかった。また　戦時中の食料統制期間中には食用のじゃがいもが男爵に統一されたため、メークインの生産は細々と行われていたが、昭和二四年にようやく食料統制が解除され、メークインの栽培が進められた。

戦後国民の食生活が安定してから少しずつメークインの需要が伸び始め、昭和三〇年ごろから人気が上昇しはじめ全国的に消費量が拡大した。

男爵は表面がゴツゴツしているのに対して、メークインは俵形でややほっそりしており、芽が浅いために皮がむきやすいという特徴がある。中は黄色で粘りがあり煮崩れしにくいため、肉じゃがなどの煮物に多く使われる。関西方面ではメークインの消費量が多く、関東方面ではホクホク感のある男爵が多い、

檜山農事試作場跡地（今のJA新はこだて厚沢部基幹支店の裏）にある「メークイン発祥之地」の石碑

という傾向がある。

大正農協（現帯広大正農協）は厚沢部と同じく弟子屈などから種を入れ、昭和二五年から栽培を始め、旧厚沢部農協と手を携え、関西方面から九州にかけて宣伝活動を行い、「メークイン」の銘柄を築き上げた間柄で、今も両者は毎年交流を続けているとのことである。

メークインの収穫作業

ゆるキャラの元祖的存在、カントリーサインにもなっているおらいもくんのマンホール

厚沢部町は、「メークイン発祥之地」であり、メークインの生産に誇りをもっている〝おらいもくん〟のマチである。（参考文献「記念碑に見る北海道農業の軌跡」北海道協同組合通信社、「みのりへの道―農産物品種物語」日本農業新聞編ほか）

5．黄金千貫（こがねせんがん）（さつまいも）を作っているマチ

札幌酒精工業㈱が焼酎メーカーとしてのプライドに賭け、創業七〇周年を機に、安心・安全な食品として高い評価を受けている北海道の農水産物を使い、乙類の本格焼酎を生産しようという計画を立てた。さつまいもの黄金千貫は風味豊かで、でんぷん質が凝縮している大型の芋であることから、本格芋焼酎の原料として最適であるが、暖かい地方の作物で寒さに弱いため、北海道での栽培は無理と思われていた。しかし、平成一五年にメークインの一大産地であり比較的温暖な地である厚沢部町で原料となる黄金千貫の試験栽培を三戸の農家に依頼し、その年収穫した黄金千貫を原料に札幌本社工場において乙類の芋焼酎を試験生産し販売した。その名は「喜多里（きたさと）」、北の大地の恵みが大きな喜びをもたらし、農山漁村が豊かになる北海道であって欲しいとの願いが込められているとのこと。その後、育苗、植栽から収穫までのすべてを一貫して行い、平成一八年一〇月に生産地厚沢部町に工場を建設した。黄金千貫は収穫後三、四日程度で劣化し、冷凍保存も効かないデリケートな素材だからである。遂に当地厚沢部町に、定評のあるメークイン栽培技術と豊かな森からもたらされる良質な水資源との融合が実現したのである。他に厚沢部町産メークイン、厚沢部町および今金町産二条大麦、南茅部産昆布をそれぞれ原料とした三種類の焼酎「喜多里」が製品化されている。

現在、黄金千貫等原料の生産は、札幌酒精工業㈱との契約農家二三戸が都合、黄金千貫一二

札幌酒精工業㈱厚沢部工場

町、メークイン二町を作付けしている。

農業生産法人株式会社ノアールは芋焼酎の製造過程で発生する焼酎粕を利用し、燃焼用メタンガスの製成と液肥を生産するバイオプラントを工場に併設して建設した。メタンガスの燃焼と工場から排出される蒸留冷却水を利用する熱交換システムを取り入れた大型温室では、黄金千貫の苗の栽培と、ベビーリーフ等の水耕栽培を行っている。

厚沢部町は、初めて北海道産本格芋焼酎が誕生したマチである。

札幌酒精工業㈱厚沢部工場の地下貯蔵甕

農業生産法人㈱ノアールの大型温室

6．農業のサポートに全開のマチ

厚沢部町の特産品には他に光黒大豆、大根、とうもろこし、メロンがあり、近年は立茎アスパラガス、ブロッコリーなども生産している。そのような厚沢部町の基幹産業である農業を支えているのは厚沢部町農業活性化センター、厚沢部町農業振興公社である。

厚沢部町農業活性化センターは平成四年四月に町が設立し、①基幹・主要作物の生産振興、品質向上に関する調査研究、②新規作物・栽培法の調査研究と農業者の新しい取り組みとの連携、③土壌分析・診断事業、④優良種苗の安定生産に関する調査研究などを目的として活動している。

また、厚沢部町農業振興公社は、農家の野菜作付が増えるにしたがい、顕在化する過重労働、労力不足、農業者の高齢化に対する農業者への支援体制の整備を図ることを目的とし、農作業の受託、育苗事業を行うため、町と旧JA厚沢部町が出資し、有限会社として設立された。

活性化センターは、最近では、立茎グリーンアスパラガスの厚沢部町での栽培を確立し普及に努めている。何故露地栽培ではなくハウスの立茎栽培かというと、生産規模的に多くを望めない厚沢部町の事情から、上川・空知の大産地が大量に出す六月、七月を避け、その前後に出荷するためである。土壌分析を活性化センターが、苗の供給を振興公社が、ビニールハウスの資材の購買、アスパラガスの販売をJAが、ビニールハウス導入の補助等のバックアップを町が、技術指導を普及センターがそれぞれ役割分担して農家をサポートしている。

活性化センターの次の狙いはスイーツ品種のさつまいものようである。

農業が基幹産業の厚沢部町は、新規作物などの栽培の研究を重ね、次から次へと農業の新しいアイデアが生まれるマチである。

ただし、往時を知る編集者に

とって、大根について作付面積、反収がそれぞれ約二割減少（桧山振興局農業統計H15／H21対比）しているのが気になるところである。

役場内に展示されている厚沢部産のさつまいも

7．〝世界一素敵な過疎の町〟を掲げるマチ

厚沢部町は昭和四〇年頃約一万人だった人口が、平成一七年国勢調査時には四、七七五人と過疎化が進む。そこを逆手に取ろうと、平成二一年三月に「素敵な過疎のまちづくり基本条例」を制定し、同年九月に町が一〇〇％出資の「素敵な過疎づくり株式会社」を設立。移住情報を紹介するホームページやパンフレットも作成した。

「世界一素敵な過疎の町」を掲げ、移住希望者を募っている。「最終的に移住してもらうにはハードルは高いが、滞在すれば良さが分かってもらえる」と考え、平成二二年二月、厚沢部建設協会が四棟の移住体験用住宅を建築した。近代的な二階建てや和風の平屋などさまざまで、家具や家電は備え付けられている。

「過疎だからこそできることや魅力がある」と移住体験事業「ちょっと暮らし」のPRにも熱が入っている。体験用住宅は同年四月から利用され、平成二二年度実績で延べ六九人の利用があったという。

計画には当初、住民から「マイナスイメージ」との声も寄せられていたが、同社は総務省などが主催する平成二三年度の過疎地域自立活性化優良事例表彰の「全国過疎地域自立促進連盟会長賞」を受賞した。

過疎を悲観するのではなく、ポジティブに捉えた新たな視点での取り組みは、先進的なモデルとなり、町民の協力体制や今後も高い成果が期待されるという評価を受け、今回の受賞となったとのことである。

体験型住宅タイプD

渋田町長は「過疎対策として懸命にやってきたことに目を向けてもらい光栄」と喜ぶ。表彰式と事例発表は一〇月一三日に愛媛県西予（せいよ）市で行われ、渋田町長らが出席した。

厚沢部町は、今後も農業をはじめとして創意工夫の取り組みが楽しみなマチである。

㈳北海道地域農業研究所
特別研究員　西野義隆